へしこ

松田一夫

2020.4.2

新がん検診への工程

内閣府の世論調査（2016年）によると、がん検診を受けない理由として最も多いのは「受ける時間がないから」（30・6％）だが、「検査の苦痛」（7・6％）を挙げる人もいる。だから苦痛のない検診、自宅でできるがん検診に期待が集まるのだろう。たった1滴の血液や尿で、がんを正確に見つけられたらとても便利だ。

しかし、既にがんと診断された人で正確にがんを当てられた検査でも、無症状の一般市民を対象に同様に当てられるかはわからない。また臓器が特定されず「どこかにがんがある」という結果では、全身をくまなく調べる必要があり、がんが見つからなければ、いつがんが見つかるのかという不安な日々が続く。

がん検診の目的はがんをたくさん見つけることではない。その目的は集団のがん死亡率の減少だ。効果が確認されているのは①胃X線か内視鏡を使った胃がん、②胸部X線、またたばこを多く吸う人では痰の細胞検査を組み合わせた肺がん、③便潜血検査の大腸がん、④マンモグラフィーを使った乳がん、⑤子宮の細胞を検査する子宮頸（けい）がんの五つの検診だ。

新たながん検診の有効性の検証にはランダム化比較試験を行う。くじで二つのグループに分け、対象者の半分に従来の検診、残りの半分には新たな検診を受けてもらい両者のがん死亡率を比較する。実施には極めて長い時間と多額の費用がかかる。それで死亡率減少効果が明らかになれば、次はパイロット研究で実施可能性を検証し、やっと一般市民を対象のがん検診に利用できる。新たながん検診はまだそのスタートに立ったばかりだ。（県民健康センター所長）